昔の農業と生活

神前地区社会福祉協議会
かんざき風物詩編集委員会
神前地区市民センター

神前 ふるさとマップ

御池沼沢植物群落
竜宮池
開拓碑
四日市中央工業高校
文化財整理作業所
菅原町
市民緑地 とうりゃんせ
大日山遺跡地
菅原神社
西野船
四日市I.C.
大日寺
光徳寺
若宮八幡社
崎計谷
寺方町一区
新池
長谷池
介護総合センター かんざき
曽井町
ひすい谷
寺方町二区
ライスセンター
人権プラザ 神前
寺方児童集会所
三重西小学校
三重平 中学校
弁慶石
圓勝寺
三滝川
高角I.C.
新高角大橋
赫正寺
公剛寺
道しるべ石
高角神田天白神社
歩道橋
矢合川
高角橋
矢合橋
高角町
神前地区 市民センター
神前小学校
神前幼稚園
神前保育園
保曽井神社
記念碑
真教寺跡
そり橋
薬地蔵
観音寺
神前神社
サイホン式水路
三滝 中学校
高角駅
高角 郵便局
神前 郷土資料館
化粧の水
三滝西水源地
矢合
歩道橋
中消防署 中央分署
尾平町
上名ヶ丘
美里ヶ丘
R477バイパス
春田池
四日市 商業高校
薬師堂
永代寺跡
神明神社
一貝堂社
夜泣き石
神前橋
曽井町（南川原）
下水処理場
欣浄寺
大正天皇行幸記念碑
永井遺跡
永代寺川
R477
川島駅
ショッピング センター
三重農学校跡
大鳥居
生桑橋
尾平駅
水道局管理センター
尾平町南

はじめに

このたび、「ふるさと神前」（平成 17 年発行）、「かんざき風物詩」（平成 24 年発行）に続いて、四日市市の地域活動費を活用し、「昔の農業と生活」が発行されますことを、心からうれしく思います。

『神前郷土資料館』には、昭和期を中心に使われていた農具や生活用品などが展示されており、この冊子は、それら一品一品を写真入りで紹介するものです。

この冊子のねらいは、地域の方々からご提供いただき集められた、昭和期に実際に使われてきた農具や生活用具などを顧みて、昔の人々の暮らしを次世代に知っていただき伝えていくためのものであります。

いま、『神前郷土資料館』は、特別な場合（地区文化祭等）以外は開放されていませんが、これを機会に、昔を知らない子どもたちに、総合学習の時間などを利用して、今と昔の暮らしの変化について、この冊子で予備学習してもらい、資料館の現物と照らし合わせ歴史を学んでいただければ幸いであります。最後に、この冊子発行に際しまして、大変ご尽力いただきました「かんざき風物詩編集委員会」のメンバーの皆様に厚く御礼を申し上げます。

神前地区社会福祉協議会

会　長　　坂倉　靖夫

「昔の農業と生活」　発行によせて

このたび、平成３０年度地域活動費事業の一つとして、神前郷土資料館の展示品を写真入りでわかりやすく解説した「昔の農業と生活」が発行されることとなりました。

神前郷土資料館は、農機具や生活用品など、地域の昔の暮らしを知ることができる資料が多数展示されている地域の貴重な資源です。その展示品の数々が写真入りでわかりやすく解説された「昔の農業と生活」により、地域の皆様が、神前郷土資料館そのものや、展示品について、より深く知っていただけるものと思います。

展示品からは昔の暮らしが懐かしく偲ばれ、昔の暮らしを知らない若い世代の方はふるさとの歴史を学ぶことができます。さらにはふるさと神前への愛着をより深めていただくことにつながれば幸いに思います。

最後になりましたが、この冊子を作成いただいた「かんざき風物詩編集委員会」の皆様の、長年にわたる神前の歴史についての地道な調査研究に対し、心から敬意を表し深く感謝を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

神前地区市民センター

館　長　西村　敦志

展示品目次

番号	名　　称	頁
	農　　業	
1	飼い葉切り	4
2	田鞍	4
3	牛の草履	4
4	ヒコーキ（砕土機）	4
5	馬鍬	4
6	唐鋤	4
7	畝立	4
8	鍬（風呂鍬）	5
9	畦切り	5
10	田舟	6
11	ガンヅメとゴロンボ	6
12	千歯こき	7
13	足踏み脱穀機	7
14	トンボ	7
15	唐箕	7
16	とおし	7
17	米選機	8
18	発動機・臼摺り機・米選機が一体となった機械	8
19	じょうご	8
20	桟俵	8
21	棒秤	9
22	皿秤	9
23	台秤	9
24	大八車の車輪	9

番号	名　　称	頁
25	水車の歯車	9
26	麦の土入れ	10
27	ぼしゃらたたき	10
28	れんげ刈り	10
29	肥桶	10
30	横槌	10
31	俵編み機	10
32	筵編みと筵打ち	11
33	藁製品のふご	11
34	縄ない機	11
35	蓑と笠	11
36	藁草履と草履編み	11
37	みかんの選果機	12
38	みかんの出荷用段ボール箱	12
	養　　蚕	
39	給餌笊とい網	14
40	い網を作る台	14
41	桑摘みかご	14
42	しく（まぶし）	14
43	しく編み台	14
44	しく用の藁に折り目を付ける道具	14
45	練炭作り器	14
46	練炭火鉢	14
47	繭の毛羽取り	15
48	座繰りと糸車	15
49	糸繰車	15

展示品目次

番号	名　　称	頁
50	かせ車	15
51	機織り機	16
	生　活　用　品	
52	釣瓶桶	18
53	井戸の底に落ちた桶を拾う道具	18
54	手桶	18
55	手押しポンプ	18
56	たらい	18
57	手洗桶	18
58	火鉢	19
59	消壺	19
60	茶釜	19
61	あんか	19
62	蝋燭立	19
63	炭火を入れたこたつ	19
64	醤油樽	20
65	斗壺	20
66	芋切り	20
67	麦ひしゃき	20
68	飯ふご	20
69	弁当箱	20
70	せいろと羽釜	20
71	押し寿司器	20
72	あられ煎り	20
73	長持	21
74	葛籠	21

番号	名　　称	頁
75	饅頭の折	21
76	三三九度の盃	21
77	鏡台	21
78	高枕	21
79	ゆさ	21
80	教科書	22
81	輪	22
82	明治時代の机と椅子	22
83	オルガン	22
84	村立神前小学校の鬼瓦	22
85	神前村役場の鬼瓦	22
86	文箱	23
87	大福帳と算盤	23
88	選挙の投票箱	23
89	抽選機	23
90	ラジオ（昭和初期）	23
91	蓄音機	23
92	第二次世界大戦の軍服	23
93	電気アイロン	23
94	映写機	23
95	万力	24
96	パイスケ	24
97	タコ	24
98	橋名板	24
99	ほら貝	25
100	腕用消防ポンプ	25

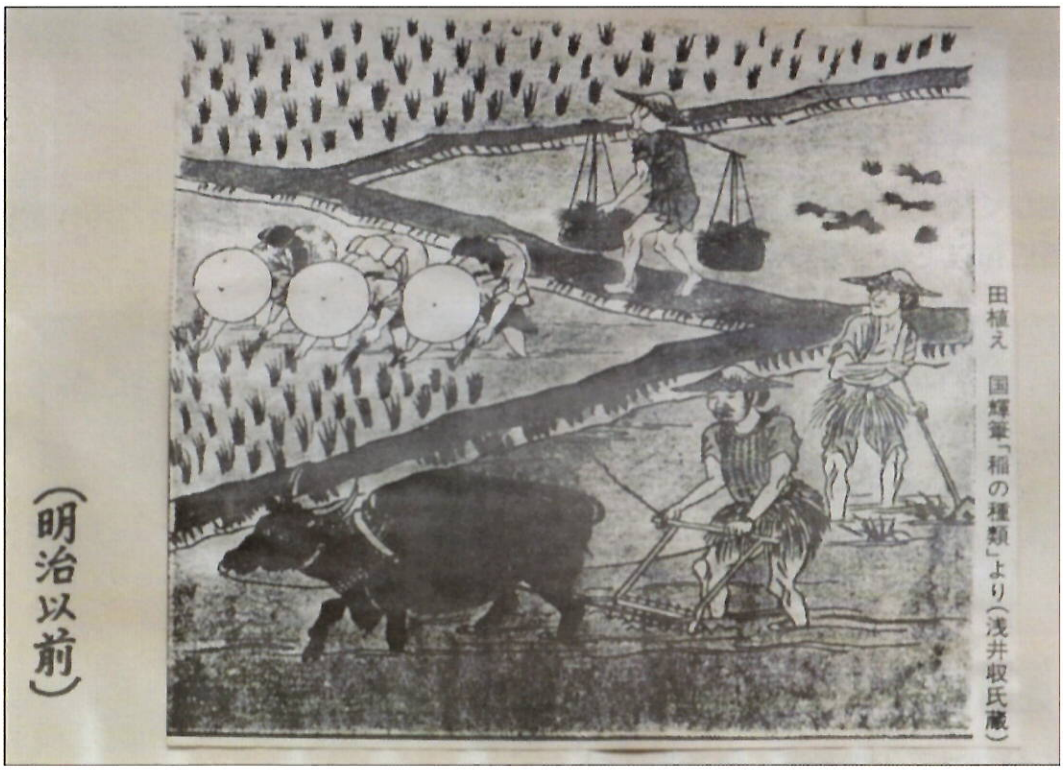
農　業

私たちの住む神前地区は、昭和 40（1965）年頃まで農業が生活の基本でした。

神前郷土資料館には、古くは大正時代から昭和 30（1955）年代まで農業に使われていた道具が数多く残されています。今では機械化が進み使わなくなったものもありますが、展示されている道具には、昔の人の知恵や工夫がたくさんあります。

ここでは、農業に使ったさまざまな道具を紹介します。

神前郷土資料館に展示してある道具は、聞き取りをした人が使っていた呼び名で紹介していますので、人により違う呼び方をしていた場合もあるようです。



今では、田や畑を耕したり田植え・稲刈りなどの作業はトラクターなどの機械を使うのが当たり前ですが、昭和30年代までは牛が農業には欠かせませんでした。

農家は牛を大切に飼い、人間と牛が一緒になって農業をおこなっていたのです。

1　飼い葉切り

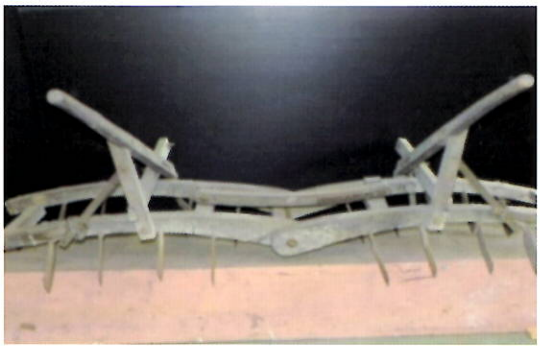
牛のえさになる藁を切る道具

2　田鞍

農耕時に牛馬の背に置く鞍

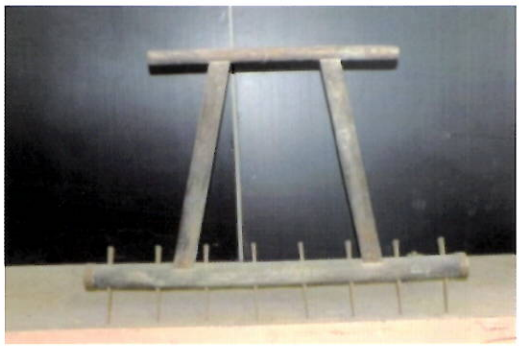
3　牛の草履

牛が道を歩くときに蹄が傷まないように履かせた



4　ヒコーキ（砕土機）

土を細かく砕くための道具
牛が鞍に付けて引っ張った

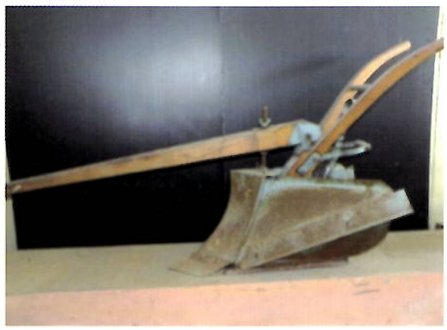


5　馬鍬

水田の代掻きに使う畜力用作業機

6　唐鋤

牛馬にひかせて田畑を広く耕すのに用いる農具で、主に畝立の時に使用する



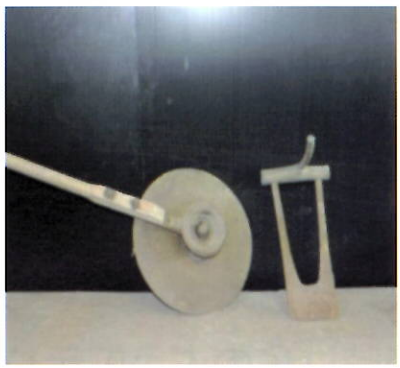
7　畝立

農業をするためには、たくさんの道具が必要でした。鋤(すき)や鍬(くわ)も、仕事に合わせて工夫して使いました。

現在では機械化が進み、使われていないものもたくさんあります。

８　鍬(くわ)（風呂鍬(ふうろぐわ)）

田畑を耕すのに使う道具
先端が金属でできている



９　畦(あぜ)切(きり)

春になると、山の神さんが里へ下りて来られ田の神さんになるといわれています。氏神さんでは御鍬(みくわ)まつりがおこなわれ、田植えの準備にとりかかります。水を引き、苗代(なわしろ)に種もみを蒔(ま)いて苗を育てるとともに、畦(あぜ)を作り、田を起こして田植えをします。

今では田植え機で一日で終わる仕事も、昔は親戚(しんせき)や近所同士でお互いに助け合いながら何日もかかっておこないました。

また、昭和の初めころには子どもたちも手伝いをするために、学校が「田植え休み」になったそうです。

１０　田舟（たぶね）

湿田内で、苗・肥料・稲などの運搬に使用した

１１　ガンヅメとゴロンボ

田の草を取る道具

田植えが済むと、「野上（のあが）り」といって、みんなで集まってごちそうを作って食べたそうです。

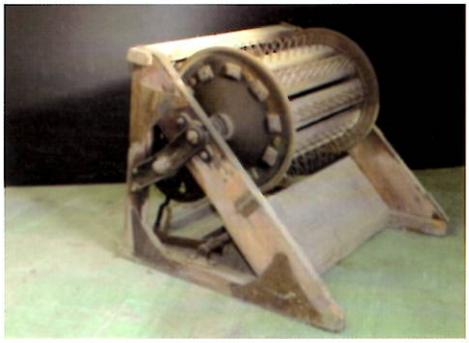
夏の間、田の草取りや水の管理など多くの仕事があります。お米ができるまでに八十八回の手間が必要なことが、「米」という漢字の由来だそうです。

また、当時は今のようにテレビもインターネットもなく、情報もすぐ入らない時代でした。しかし、先祖からの言い伝えや経験をもとに天気や自然現象を予測し、少しでも多くの収穫があるようにと願いながら米作りをおこないました。

秋の取入れはいまよりもずっと遅く、11 月初め頃でした。
春と同じく、稲刈りも親戚同士が助け合いました。
稲刈り・稲架掛け・脱穀・俵詰めなど、全て手作業でした。

12　干歯こき

櫛の目で稲の穂をしごき、籾を落とす
大正時代頃まで使われた



13　足踏み脱穀機

足でペダルを踏んで円柱部分を回転させ、作業効率を良くした

14　トンボ

籾を天日干しするために筵の上に広げる道具

15　唐箕

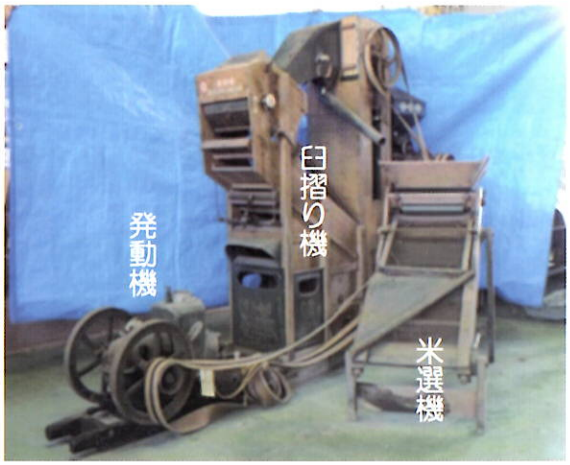
米・麦・大豆・ごま・菜種など、収穫した穀物を選別する道具
両側に吸込口のある鼓胴の内部に 4 枚ほどの羽根を設け、その風力で上部の漏斗状の受入器から落下する穀粒と塵とを選別する

16　とおし

さまざまな穀物の選別をするのに用いた

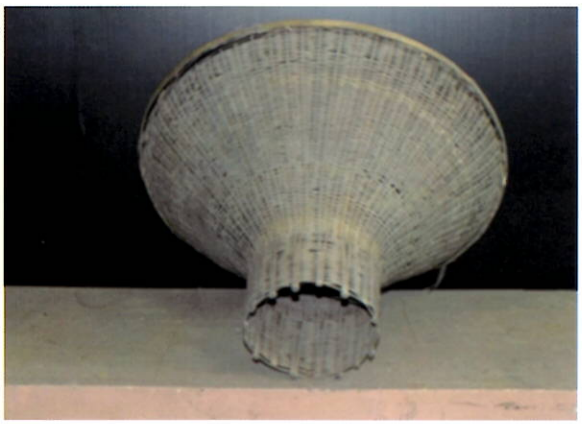
１７　米選機

臼摺り機から出た玄米を、良い米・小米・籾の３つに分類する機械
大正時代に使われていたもの



１８　発動機・臼摺り機・米選機が一体となった機械

昭和 30 年頃のもので、発動機を使い臼摺りと米の選別が連続してできる



１９　じょうご

俵や、かます（藁筵を折り両端を縫った袋）に計量した玄米を入れるときに使用した

２０　桟俵

米俵の両端にあてる丸い藁製のふた

【参考資料】俵

収穫した米を俵に詰めるときには棒秤を使って重さを量っていましたが、台秤の普及で効率的に作業がおこなえるようになりました。

21　棒秤

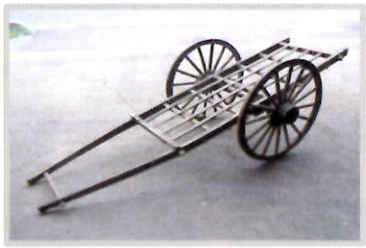
23　台秤

重くかさばる物を量るはかり
量ろうとする物を台の上に乗せ、
その重量を、てこやばねによって
目盛りのある棹や盤に伝える

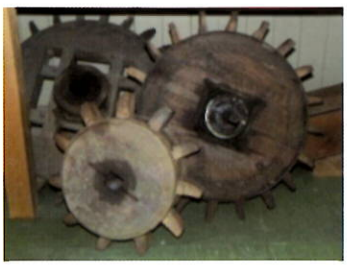
22　皿秤

自動車も農業用の機械もない時代、米俵を運ぶのは大八車と呼ばれる大きな車輪の付いた荷車でした。また、水車の動力を利用して米つき・籾すり・粉ひきなどをしました。

24　大八車の車輪



【参考資料】
大八車



25　水車の歯車

【参考資料】
水車小屋のしくみ

農業の道具も現在とは違い、持ち手は木製で先端だけが金属製のものがほとんどでした。道具が壊れると、身近な材料で自分で修理して使いました。それぞれの道具は正式な名前がないものが多く、その姿かたちや作業中に聞こえる音をもとにした名前で呼ぶことが多かったようです。

26　麦の土入れ

27　ぼしゃらたたき

28　れんげ刈り

29　肥桶

下肥の運搬用に使用した
牛馬車での運搬中に中身が漏れないように蓋がついている
縁タガのあるのが特徴

農閑期にはどの家も、米や麦の収穫をした後の藁を使い、ぞうり・縄・むしろ・俵などの藁製品を作りました。中でも高角町を中心に作られた「ふご」は『水を入れても漏れない』と評判が良く、近郊の農家にも重宝されたそうです。

30　横槌

藁を叩き柔らかくして藁製品を作りやすくした

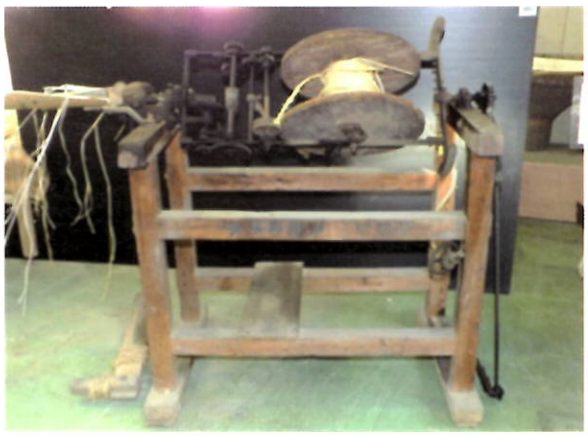
31　俵編み機

米俵、炭俵、菰、もっこなどを編むときに使用した
縦縄として４本を用い、両脚で支えた横木に等間隔で４か所の溝があり、そこに縦縄をかけて編んだ

32　筵編みと筵打ち

左は大正時代の道具で手だけで編むもの
右は昭和初期に作られたもので、足で踏み込むと横藁が自動で編みこまれていく

33　藁製品のふご



34　縄ない機

ラッパ口から藁を入れペダルを踏み、
撚りをかけた縄をタイコに巻き取る

35　蓑と笠

36　藁草履と草履編み

曽井のみかん

曽井町では現在も山の傾斜を活かし、みかんの栽培が盛んにおこなわれています。

曽井みかん組合（組合員 50 戸）は、晩生みかんを熟成することで酸味が中和され甘みが増す貯蔵みかんの産地化を図る目的で、昭和 33 年に木造平屋建て 70 ㎡の集荷・貯蔵施設を建設しました。（平成 29 年解体）

横から見たところ

上から見たところ

37　みかんの選果機

昭和 33 年に導入された選果機
左の箱状の所に入れたみかんが 3 種類の大きさに分別される
みかん小屋で使用されたもの

みかんの出荷用木箱のラベル

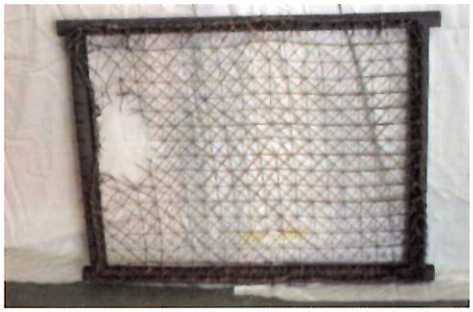
38　みかんの出荷用段ボール箱

昭和 30 年頃は木箱が多く利用されていたが、当時から曽井町では共同出荷用に段ボール箱が使われていた

養蚕（ようざん）

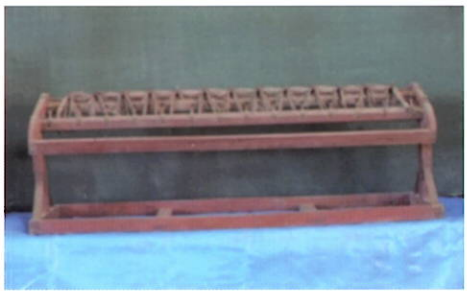
神前地区では養蚕（ようざん）も盛んで、多くの家庭では生活空間を犠牲（ぎせい）にして春・夏・秋の年３回養蚕（ようざん）を営んでいました。

どの家も座敷の畳をはずし、蚕架（さんか）（蚕（かいこ）を飼うための棚）を組み、家族総出で蚕（かいこ）の世話をしました。養蚕（ようざん）は、農家にとって大切な現金収入の源であり、一生懸命に頑張りました。



39　給餌笊とい網　　40　い網を作る台　　41　桑摘みかご

給餌笊は、蚕と桑の葉を乗せて蚕架（養蚕部屋に組んだ棚）
に差し込んで蚕を飼育する笊
い網はい草で編んだ目の細かい網で、稚蚕が落ちないように
給餌笊に敷いた



42　しく（まぶし）　　43　しく編み台　　44　しく用の藁に折り目をつける道具

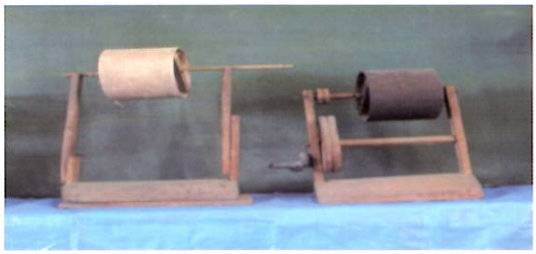
藁を編んで作り、成長した
蚕を移し入れる
蚕はこの中で繭を作る

45　練炭作り器　　46　練炭火鉢

養蚕部屋の暖房に使用した

47　繭の毛羽取り

繭の周りにあるばらけた糸を毛羽と言い、これを取り除く道具
左は大正時代、右は昭和時代のもの



48　座繰りと糸車

繭を湯に入れ、ほぐした糸を巻き取る道具

49　糸繰車

竹の車とつむからなり、機織りのよこ糸となるつむに糸を巻き付けたりつむにからませた綿から糸を紡いだ

50　かせ車

かせ糸を掛けて回転する
かせ糸を小枠に移すときに用いる

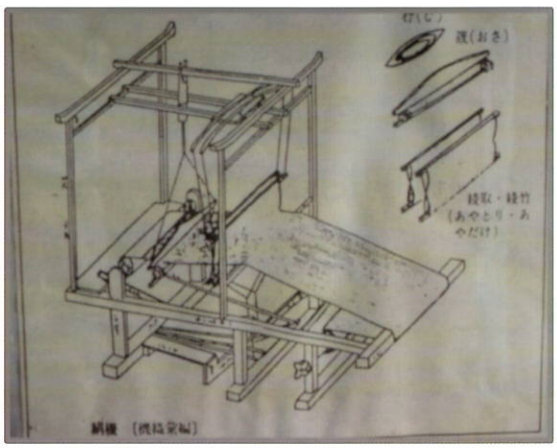
かつては、蚕を飼わない家は「駐在さんか神主さんか」と言われるくらい神前地区でも養蚕が盛んでした。１年間に春蚕・夏蚕・秋蚕があり、蚕を病気から守るために養蚕室と蚕具の消毒、部屋の保温などにも気を配りました。

蚕のえさになる桑摘み、フンの掃除など、家族全員が目の回るような忙しさで、家の中は蚕でいっぱいになり、人は蚕棚の下で寝ることもありました。繭づくりが終わると、しくから繭を取り出し繭の表面に付いた毛羽を取り除き、選別して袋に入れて製糸工場へ共同出荷しました。

51　機織り機

機械の両端に張られた糸（たて糸）を足元のペダルで上下させ、交差したたて糸の間を舟と呼ばれるよこ糸を巻き付けた棒状のつむを乗せたひを左右に動かす動作を繰り返すことで布を織る

【参考資料】　機を織る女性たち



【参考資料】機織り機のしくみ

生活用品

昔の生活用品は、村の中に鍛冶屋（かじや）、桶屋（おけや）などがあり、壊れたり古くなったものを何度も直して使いました。

また、現在のように水道・電気・ガスが整備されてなかったため、水や火をとても大切に使いました。

昔の生活には人々の知恵と節約があふれていました。

昔（昭和 30 年代頃まで）はおくどさんで煮炊きをした

52　釣瓶桶

53
井戸の底に落ちた桶を拾う道具

54　手桶
井戸から汲み上げた水の運搬用

55　手押しポンプ
井戸水を汲み上げる

56　たらい

57　手洗桶
僧侶・医者などが家に来た時に使用した

水道のない時代、水は井戸や川から汲んだものを溜めて大切に使いました。

村を流れる川には水汲み場と洗濯場があり、水車より上で風呂の水汲みや野菜や食器洗いをして、水車より下で洗濯をしました。

また、煮炊きに使う水は井戸水を使いました。

58　火鉢（ひばち）

59　消壺（けしつぼ）

おくどさん（かまど）の炭火を消すときに入れる

60　茶釜（ちゃがま）

61　あんか

62　蝋燭立（ろうそくたて）

63　炭火（すみび）を入れたこたつ

中に入れた皿に炭火を入れ、布団を掛けて暖をとった

64　醤油樽

65　斗壺

酒・酢・醤油などが一斗（18ℓ）入る

66　芋切り

サツマ芋を薄く切り、乾燥させて保存した

67　麦ひしゃき

68　飯ふご

昭和20年代頃は、炊いたご飯をおひつに移し、藁で編んだ飯ふごに入れて保温した

69　弁当箱

左は木の皮で作った曲物（わっぱ）
右は竹籠

70　せいろと羽釜

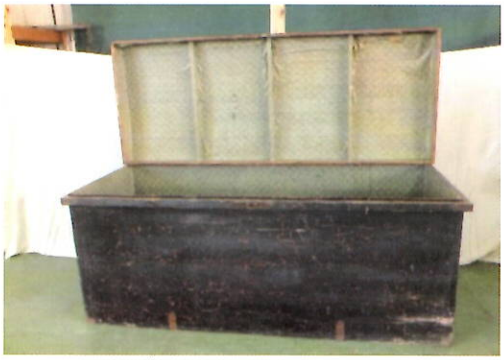
もち米・赤飯・饅頭などを蒸すのに用いた

71　押し寿司器

祭のときなどに押し寿司を作る道具
当時は寿司と言えば押し寿司だった

72　あられ煎り

昭和30年代頃までは、冠婚葬祭をはじめ日常の食べ物は、ほとんど自家製でした。



73　長持（ながもち）

この中に嫁入り道具の布団や衣類を入れて運び、そのまま収納家具として使用した

74　葛籠（つづら）

衣類を入れるための箱型の籠（かご）
防虫効果が高い

75　饅頭（まんじゅう）の折（おり）

祝言（しゅうげん）（婚礼）のときに、松竹梅（しょうちくばい）のまんじゅうを入れて、天秤棒（てんびんぼう）で担（かつ）いで運んだ
当日は玄関に並べて飾った

76　三三九度（さんさんくど）の盃（さかずき）

77　鏡台（きょうだい）

丸い部分に鏡を置いて、髪を結ったり化粧をした

78　高枕（たかまくら）

日本髪に結った髪が崩れないように首にあてがい、頭を高くして眠った

79　ゆさ

この中で赤ん坊を遊ばせたり眠らせたりした

８０　教科書

明治・大正・昭和初期のもの

８１　輪

学校の始まりを知らせた

８２　明治時代の机と椅子

右側に硯を置く台があり、前方には本を立てる隙間がある

８３　オルガン

８４　村立神前小学校の鬼瓦

昭和６年に竣工した講堂の屋根瓦

校章である八咫鏡の模様入り

８５　神前村役場の鬼瓦

鬼瓦の「水」の文字は火災除けのお守り

86　文箱

87　大福帳と算盤

88　選挙の投票箱

89　抽選機

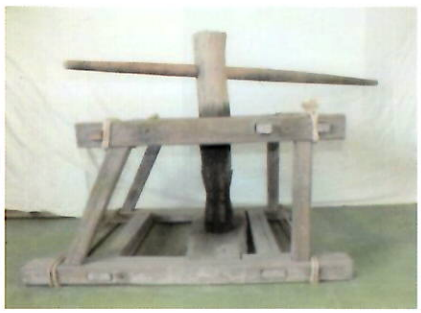
90　ラジオ（昭和初期）

91　蓄音機

92
第二次世界大戦の軍服

93
電気アイロン

94
映写機



95　万力（まんりき）

中心の棒にロープを巻き付けて取手を押し回し、重たいものを引っ張り動かす

96　パイスケ

砂・小石の建築用土砂などを運ぶ籠（かご）
本体は水切りが良いように竹で編んである

97　タコ

木造建築の基礎部分の地固めに使う
３～４人で持ち手を握り持ち上げ、落ちる時の重力で地盤を固める

昔は道普請（みちぶしん）・家の建築の基礎などは、村で協力し合い全て手作業でおこないました。

左の写真のように、物を運ぶ時も、ふご（米・飼葉（かいば）など）・かご（桑の葉・茶葉など）・担桶（にないおけ）（下肥（しもごえ）など）を担（にな）い棒（ぼう）の前後に掛け支柱のところに肩を当てて、荷物のバランスを取りながら人力で運びました。

98　橋名板（きょうめいばん）

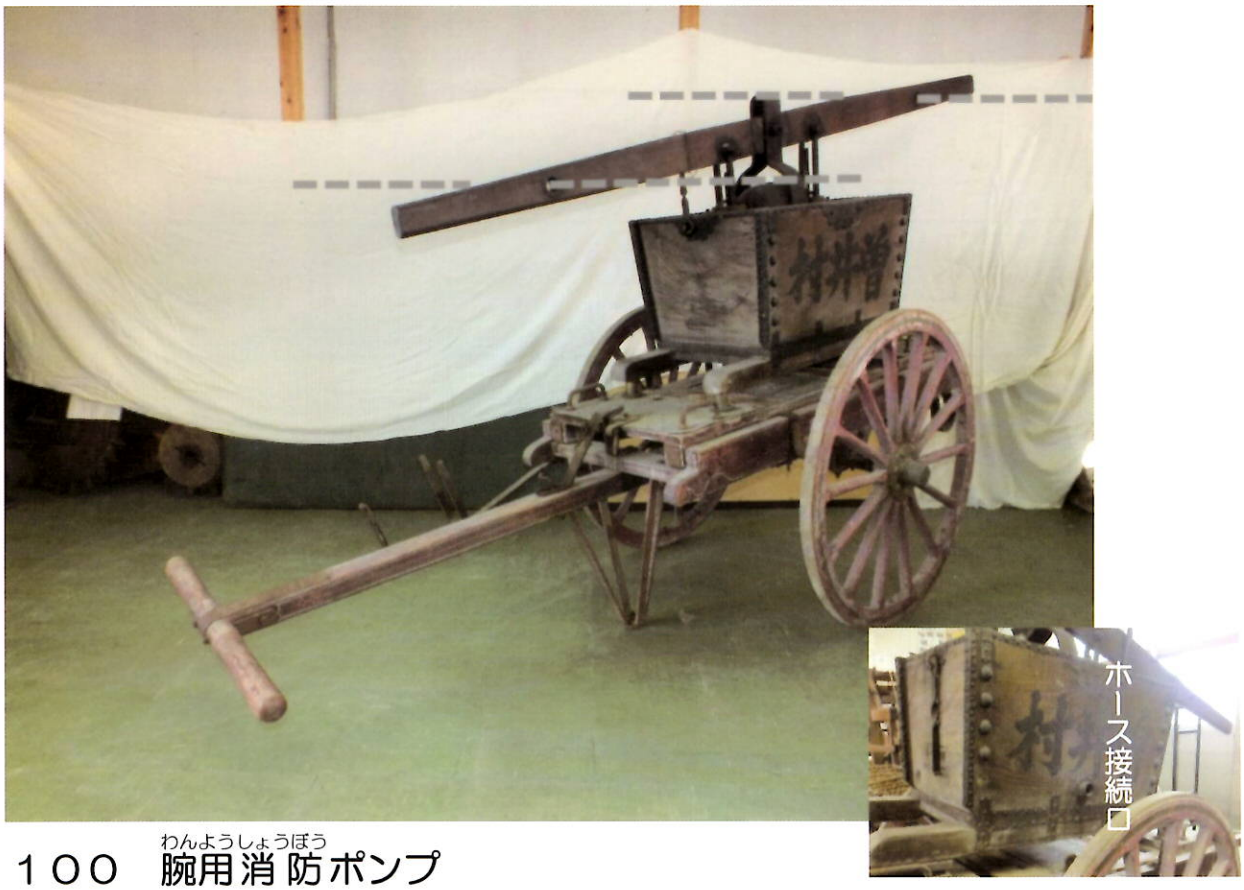
記念橋は、現在の神前橋の下流に架（か）けられていた
完成が皇紀（こうき）2600年（1940）であったので、それを記念して「記念橋」と命名されたといわれている
橋ができる以前は、三滝川の川原の水のある部分に板を渡して通行していたが、本格的な木造の橋の完成で、川島地区との交流も進むと期待された
しかし、橋が完成して以後、台風による増水で二度の流失に遭（あ）っている
三滝川の河川敷にある広場には流失当時の橋台の一部が名残（なごり）を留めている

昔は火事がおきると、半鐘を鳴らして知らせました。
また、三滝川が氾濫するとほら貝で知らせ、村中で力を合わせて災害に対応しました。

９９　ほら貝

寄り合いや災害時の呼集などに使用した

火の見櫓（曽井町）



１００　腕用消防ポンプ

ポンプを専用の車に載せ、火災現場へ運ぶ。現場に到着するとポンプを下ろし、村の若者を中心に水を升に入れ、放水ホースをセットして、握り棒（点線）を４人でシーソーのように上げ下げして圧を掛け放水する

メ　モ

【編集委員】

森寺　紀夫
坂倉　　馨
加藤　武治
門馬　和弘
石川　雅己
中川　里美

【協　　力】

平尾　　浩（地域づくりマイスター）
神前小学校
三滝中学校
観音寺（曽井町）

昔の農業と生活
2019年3月1日　発行

編集者　かんざき風物詩編集委員会
発行者　神前地区社会福祉協議会
（神前地区市民センター内・神前団体事務局）
三重県四日市市高角町 2977 番地
（059）327-1501
神前地区市民センター
三重県四日市市高角町 2977 番地
（059）326-2751
印刷所　フコク印刷工業有限会社
三重県四日市市東日野町 2-8-1
（059）322-2022